「いわての復興教育推進事業（交流学習スクール）」成果報告書

学校名：宮古市立第一中学校

Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

本校では、復興教育の目標の一つに、「郷土を愛し、誇りに思う心を育てるとともに、復興・発展を支える人材を育成する」というものがある。この目標を達成するためには、様々な地域の方々と交流し、その中で、改めて自分の郷土のことを見つめなおす機会が必要である。

そのためにも、本校が昨年度まで行ってきた内陸部の学校との交流（仲間や地域の人々とのつながり）は、確実に生徒たちの郷土愛が育てられ、更には復興・発展を支えようとする使命感が現れてきている。

したがって、今後も他校生徒の交流を継続し、自分たちの郷土を支えていけるような人材を育成していきたいと考えている。

本事業は、本校がこれまで行ってきた活動の幅をさらに広げ、より大きな効果が期待できるものと考え、昨年度と同様の事業とともにさらにフェリー航路で結ばれた室蘭との交流を加え以下の事業に取り組んだ。

1．復興にかける思いの聞き取り活動
　地元の商店街で震災や復興にかける思いの聞き取り

2．室蘭西中学校と交流①
　室蘭西中学校３年生が修学旅行で来校・交流

3．避難訓練の実施
　生徒が主体的に行動できるよう、避難訓練を事前に予告を行わずに実施

4．外部講師による講演
　宮古海戦の会会長澤田克司氏による講演会

5．火山防災学習と室蘭西中学校と交流②
・洞爺湖町の火山科学館を訪問し、火山災害と火山防災について学習
・室蘭西中学校を訪問し東日本大震災について調査・学習したことを発表するとともに、火山マイスターによる有珠山噴火による被害と火山防災の実際について学習

6．室蘭西中学校との交流学習等報告会
　函館でのフィールドワークや火山科学館での学習、室蘭西中学校との交流の様子について全校生徒を対象に報告会を実施。

Ⅱ　取組の概要

1　４月　【おもてなし活動と震災インタビュー】

大型客船ダイヤモンドプリンセス号の入港に合わせ、生徒が自作のリーフレットを利用したボランティアガイドとして街頭で国内外の観光客を相手に活動した。自分たちの住む地域の良さをリーフレットにまとめたり、自分の言葉で伝える活動を通して自分たちの住む地域の良さを再認識することができた。

2　５月　【室蘭西中学校との交流①】

室蘭西中学校の３年生が修学旅行で来校し本校２年生と交流した。

本校生徒は宮古の名所や産業等を紹介し、室蘭西中の生徒は室蘭市の自然や人口、産業や名所等を紹介した。

このほかに、歓迎の意味を込め、ソーラン節の演舞や「群青」の合唱を披露した。

3　５月　【避難訓練の実施】

災害は予測不能であり、災害時に迅速かつ的確な判断のもとに自分の命を守る行動をとれるように時間等の予告をせずに避難訓練を実施した。これまでの復興・防災学習によって災害への備えの意識の高まりもあり昨年以上に迅速な避難行動をとることができた。

4　６月　【外部講師による講演】

宮古海戦の会会長、澤田克司氏による講演会の実施した。戊辰戦争で官軍に追われて北行する幕軍を追撃する官軍が宮古港を舞台に海戦を繰り広げたことや幕軍には新選組で有名な土方歳三や日露戦争の日本海海戦でバルチック艦隊を撃破した連合艦隊司令長官の東郷平八郎などをはじめとする面々もこの海戦に関わっていたこと、そして自主研修を行う函館はこの戊辰戦争の最終決着地であり歴史の大きな転換点となった大きな戦であったこと、戊辰戦争は京都で始まっているが自分たちの郷土も一連の戦にかかわりがあり、この戦争を通じて北海道と宮古のつながりがあることも学んだ。

5　7月　【火山防災学習と室蘭西中学校と交流②】

（1）函館でのフィールドワーク

宮古港海戦の学習をもとに五稜郭や土方歳三の銅像などを訪ねて歴史的つながりを実感した。

（2）洞爺湖町の火山科学館

火山の噴火の仕組みや有珠山や昭和新山など洞爺湖周辺の活火山の噴火の特徴、火山災害について学んだ。昭和新山は現在もわずかではあるが水蒸気を中心とした噴気を上げており、火山の息遣いを直接感じた。

（3）室蘭西中学校と交流②

室蘭西中学校を訪問し、東日本大震災について調査したことやインタビューしたことをに加え、宮古の名所・名物についてもパワーポイントを使ってグループごとに発表した。写真や動画を加えることで具体的かつ臨場感のある発表となり、聞く側にとっても印象に残る活動であり、狙いの一つである多くの人に語り継ぐ活動ができた。

火山マイスターによる有珠山の噴火による火山災害の講演を通して、火山の噴火は正確に予測することはできないので、過去の経験からの学びを活かすことが大切で、そのために、より深く理解し、普段から災害に備えておくことが大事であること、正しい知識をもち、経験に関わらず自ら避難行動を行うことが自分の命を守ることにつながるということを学んだ。

6　7月　【室蘭西中学校との交流学習等報告会】

函館でのフィールドワークや室蘭西中学校での発表、火山防災について学んだことをパワーポイントを使い、写真や動画を交えて全校生徒を対象に発表した。発表の中で「現代は話を聞かなくてもネットで調べればいいと思っていたが、それは間違いで、経験した人にしか伝えられない思いがあり、それを聞くことができた。見ないと分からないものが世界にはたくさんある。写真ごしで見るのと全然違う。実物で見て自分の知識を広げることも大切だと思った。」と感想を述べた。

Ⅲ　取組の成果と課題

1　成果

（1）地震や津波の予知は難しく、日頃からの備えが大切であり、命を守るために必要な心構えについて確認できた。

（2）交流を通して、自分たちの経験を多くの人に伝えると同時に、自分たちに今できること、そして将来に向けて復興に向けてどのように取組むべきかということを考える機会となった。

（3）火山災害はまず、有珠山の噴火による火山灰や火砕流などによる農作物や建物、道路等への被害、観光客のキャンセルによる被害があったことを学んだ。さらに、その物的復興のみならず、噴火への警戒感から客足が遠のいた状態から地域の主たる産業である観光業を建て直していく様を学んだ。火山の噴火は人の生活や環境を一変させてしまうような大きな負の働きもするが、火山地形やカルデラ湖などの美しい景観や温泉等、その豊かな恵みを生かし、共に生きるために地域の人々が力を合わせて取組んでいることを学んだ。

（4）災害は津波でも火山でも自然という大きな力によっておき、方法は違っても常にそれに対する意識と備えを怠らないことが、いざというときに自分や自分の大切な人の命を守ることにつながることを学んだ。

2　課題

（1）東日本大震災から間もなく９年となり、道路や公共施設、鉄道といったインフラが整備され、復興が進むとともに震災の爪跡を目にする機会が少なくなった。また、現在の中３ですら震災当時小学校１年生であり、震災の記憶については断片的であまり実感がなく、そのような中で災害を自分の身近に感じるということが難しい。映像や聞き取りから大変なことだったということはどの生徒にも理解できるが、それはどこか遠くのことで自分の住む地域のことで、これまでにも同等の災害が繰り返し起きていたということには思いが至らないので、記憶を風化させずに伝え、どのような状況下でも生き抜くことができるように意識づけていくことが課題である。

（2）自分たちの生まれ育った地域で繰り返し起きている津波や地震については情報がたくさんあるが、その他の災害については思いが至らない。今後、３０年以内高い確率で起こることが予想される首都直下地震や東南海地震、さらには火山災害やその他の風水害等も含めて関心を持ち理解を深めることで、どこにいても、どんな時も生き抜くことができるように今回学習したことを生徒個々が災害への備えとして一般化していくことも課題である。